真実のヤクソク

鳥風羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真実のヤクソク

【Ｎコード】
Ｎ２９１７Ｚ

【作者名】
鳥風羅

【あらすじ】
五人の男子学生がある『目的』を果たすため、色んな学校を転々としながら危険な仕事をする。ギャグ多めです。

プロローグ

俺に生き延びるすべはなかった

そこは無情にも真っ白な世界で、全てを否定しているようだった

聞こえてくるのは悲鳴、絶叫、残酷無慈悲な大人たちの声

仲間が次から次へと倒れていくのを、ただ見ているしかできなかった

何もかもボロボロにされて、何を憎めばいいのかも分からなくなって

ただただ涙を流していた

死にたかった

この地獄から解放されたかった

でもそこに、お前は現れたんだ

この場所に不釣り合いな、天使のような笑顔で・・・・

白く小さな手を差し出してお前は言った

「死にたいならボクが殺してあげる」

◆◇◆◇◆◇◆

「チッ、もう終わりかよ」

いらだたしそうに言葉を吐き出す。少年の周りには１０人ほどの男子が倒れていた。意識を失っているのかピクリとも動かない。少年は制服のネクタイを緩めながら、足元に倒れている男子を見下ろしていた。

「あっこんな所にいたんだね。探したよ」

ふいに建物の陰から声がした。無造作に生えた草をかき分けながら少年に近づいてくる。

「体育館裏で喧嘩？転校初日にまた問題起こす気？おっと」

危うく倒れている男子の腕を踏みそうになりながらも、なんとか少年の前までたどり着く。

「ゆき・・・。生きてるからいいだろ」

「だめだよ。ボクらはあんまり目立っちゃいけないんだから」

「・・・店こいつらが喧嘩売ってきたんだ」

「ん～しょうがないなぁ。この人たちも無傷みたいだし今回はいっか。それにしてもよく片目だけで戦えるよね」

不思議そうに少年の顔を見る。

少年は右目に医療用の眼帯をしていた。片目が見えない状態で１０

人の男子と喧嘩した。しかも全ての男子にかすり傷ひとつつけずに。普通ではありえないことだった。右目が見えない場合、右からの攻撃に反応が遅れたり、距離感がつかめなくてうまく戦うことはできない。
しかしこの少年はそれをやってのけた。相当喧嘩慣れしているか、小さい頃から眼帯をつけているか、そのどちらかだろう。もしくは、その両方かもしれない。

「わかってるくせに・・・・」

眼帯にそっと手をふれながら呟く。ゆきはふっと微笑むと、今来た道と反対の方を見た。

「あれ？こっちは全然草生えてないじゃん。こっちから来ればよかった」
「・・・バカだろ」

歩き出したゆきのあとに続く。

「これでも心配してたんだよ。初めての校舎で迷子になってるんじゃないかなーとか、間違って人を殺しちゃってないかなーとか、拳銃をもってることがバレて逮捕されちゃったりしてないかなーとか」

さらりと危ないことを言い出すゆき。それでも少年は無言のままついていく。

「でも何もなくてよかった」

体育館の角を曲がると広いグラウンドに出た。
部活をしている生徒が多く、いくつもの部活がうまい具合に範囲を

分割して活動している。しかし、グラウンドの中心にどの部活にとっても邪魔でしかない集団があった。そこはほぼ女子だけで構成されており、常に黄色い歓声が飛び交っている。
その集団を見ながらゆきが言った。

「あそこに行くよ」
「え・・・お、俺はここにいる」
「だめだめ、隊長が待ってるんだから」

落ち着かない様子の少年の腕を掴み、無理矢理連れて行こうとする。だが、少年は足を踏ん張りそれに対抗した。

「絶対に行かねぇ！は～な～せぇ～～」
「隊長じきじきの命なんだから・・・行くよっ」

ゆきが思い切り引っ張るが少年はとっさに近くにあった鉄柱をつかむ。

「ほ、北斗が来るまで待っ・・・！！」

少年の目には女子の大群が迫ってくるのが見えた。実際には二人の男子が先頭に女子を率いているのだが、そんなのは目に映っていないようだ。これは少年にとって不幸としか言えない。

「来てくれたね。優しい隊長でよかったね」
「くそっ・・殺す」

朗らかに笑っているゆきに対し、ドス黒いオーラを放つ少年。ゆきが隊長ー！と叫んで手をぶんぶん振る。すると女子を率いていた男子の一人、制服を着崩した金髪の一見チャラそうな男子が手を振り

返してきた。

「ゆきー！柊ー！会いたかったぞーー！！」

そしてそのまま猛突進して来る。二人に抱きつこうとした隊長に少年は足を振り上げた。

「死ねっ！！」

「うぉわ！！」

あたればあごが砕けそうな勢いだったが、寸でのところでそれを避ける。

「おいおい、危ないじゃないか～。でも嬉しいぞ。これはお前にとって愛情表現だもんな」

「ふざけんな。避けんじゃねぇ」

隊長はハハハと笑い飛ばす。

そこに遅れてきたもう一人の男子が、棒つきの飴をくわえながら呆れた様子で言った。

「なんでもかんでも暴力をふるうもんじゃないっすよ」

「しんくの言う通りだよ。一般人だったら死んじゃうよ」

少年はムスッとして黙り込む。そんな様子を見ていた周りの女子達が少年に話しかけてきた。

「キミかっこいいね。北斗もしんくも好きだけど、キミも好みかもー」

「ねぇ名前は？名前教えて？」

「あっ私知ってるよ！ひいらぎ君だよ。私同じクラスなんだぁ！」
「ひいらぎ？なんかかわいい～」

少年はこめかみをひくつかせている。それをなだめるように隊長が肩をポンと叩く。

「よく間違えられるなぁ。こいつはヒイラギじゃないぜ？柊と書いてシュウと読むんだ」
「え？そうなの？うわーごめんね」
「シュウ君かぁ。あ、ねぇ。その目どうしたの？」
「ケガ？大変だねー」

そう言いながら女子が眼帯に手を伸ばす。
その瞬間、柊は反射的に手を払いのけ女子を蹴り飛ばそうとした。
だが、柊の目の前に誰かが割り込み女子をかばうようにして立つ。
ほんの数秒だった。少しずれていれば女子の腹に足がめり込んでいたかもしれない。
柊は割り込んできた者を見ると、ギリギリのところで足の軌道を変えた。

「ゆきっっ・・・」

ゆきはにっこり笑っている。攻撃を防ごうともせずに飛び込んできたのは柊を信頼している証拠だった。
呆然としていた女子が小さな悲鳴を上げる。それと同時に他の女子も悲鳴を上げて走り出した。
最後に残されたのは柊とゆき、北斗としんくの４人だけだった。

「・・・ごめん」

柊が小さく呟く。柊は大の女嫌いだった。女と話すぐらいなら平気なのだが、触れようとするものならば反射的に体が動いて相手をふっ飛ばしてしまう癖があった。
柊の肩に北斗が腕を回す。

「な～に落ち込んでんだ。いつものことだろ？俺たちは気にしちゃいねぇよ」
「別に落ち込んでなんか・・・」
「そうっすよ。女嫌いくらいずっと女子といれば直るし」
「ボクたちも見てるだけで楽しいしね！」
「・・・死ね」

柊がしんくに飛び掛った。
しんくは片手で防御しながら飴を口から出し、大声でストップをかける。

「ちょちょちょちょっ！何で俺だけ！？ゆきも言ってたっしょ！！」
「ゆきはいいんだ」
「理不尽ですよっ！！」

連続して繰り出される蹴りに紙一重でよける。避けることに集中しながらも柊の表情をうかがってみると、柊は笑っていた。
とてもとても嬉しそうに。まるで、戦うことが自分の生きがいとでも言うように。
しんくは薄笑いを浮かべ、柊の蹴りが届かない位置まで下がった。

「それならオレも本気でいかせてもらいます！」

柊がほくそ笑むと再び攻撃態勢に入る。しんくは片足に体重を乗せると、勢いよく走り出した。

そして二人が互いにぶつかり合おうとした瞬間、彼らのポケットから一斉に同じ着信音が鳴り出した。

「！！」

「チッ・・・」

二人は攻撃をやめ、携帯を取り出す。先にメールを見たらしいゆきが北斗に言った。

「今回のは簡単そうだね」

「簡単というか・・・俺たちに頼むことじゃないだろ」

「でも面白そうだよ。あっでも燈夜が来てないね」

心配そうに言うゆきに、しんくが校門の方を見ながら大丈夫そうっすよ、と告げた。しんくの視線の先を追うと、彼らと違う制服を着た少年が歩いてきた。

少年はふらふらとしながら弱々しい目で北斗を見る。

「隊長・・・仕事です」

一話　りんごの日

彼らは普通の学生ではなかった。
あるところから仕事をもらい、それなりの給料をもらって生活している。仕事の場所が転勤族並にコロコロ変わるので、いろんな学校を転々としていた。
高３の翡翠北斗。
高２の霧野柊、淡路ゆき。
高１の月影しんく。
中３の高橋燈夜。
この５人で一緒に同じ学校へ転校するので不審がられることが多かったが、その度に色々と理由をつけて何とかやってきた。そして今日も彼らは仕事に向かう。
・・・・・闇の仕事に。

◆◇◆◇◆◇◆

「まだですかねー」
「まだだな」
「・・・ぶっ殺す」

しんく、北斗、柊はコンビニで雑誌の立ち読みをしていた。

「遅いっすね。かれこれ二十分はたってますよ」
「これじゃ俺たちが怪しい者扱いされちまうじゃねぇか」
「そうっすね。そろそろここから出ます？あ、でもその前にオレアメちゃん買ってきます」

「おう。食える分だけにしろよー」
「いつも大量購入してるわけじゃないっすよ」
北斗はしんくを送り出すと隣で殺気を放っている柊に声をかけた。
「おらおら、庶民のためのコンビニで黒いものを撒き散らすな。まだ夕方だぜ？帰宅途中の学生やサラリーマンがビビッてコンビニに寄り付かなくなっちまうだろ」
前から見ても後ろから見ても不機嫌オーラを漂わせているので、ガラス越しに柊を見た人も後ろでおにぎりを買おうとしていた人もそそくさと逃げてしまった。
「お前のせいでこのコンビニが倒産したらどうすんだ？いや、このコンビニだけじゃない。お前ならこの系列の店全部を倒産に追い込むかもしれない」
一人で頷く北斗。そこにアメを持ったしんくが帰ってきた。
「おまたせしました。無事りんご飴をゲットしたっす」
「そうか。今日はりんご味か・・・って何だそれ？」
「え？」
しんくの持っている飴を凝視する。細い棒に大きくて赤い塊がささっていた。そしてその中に、
「りんご？！」
「だからりんご飴って言ったじゃないっすか」
「いやいやいや、何でりんご飴がコンビニに売ってんだよ！！」
「あっもしかして、隊長も食べたかったですか？」

「いやっ俺は結構だ！そんな怪しいもん食えねぇ！俺は夏祭りに屋台で売ってる普通のりんご飴で十分だ！！」
「そうっすか？おいしいのに」
りんご飴をペロペロなめているしんくにため息を吐く。
「腹壊すんじゃねぇぞ～。仕事中に腹痛で倒れられても俺はお前を見捨てるぞ」
「・・・仕事」
柊が呟く。すると北斗の後頭部に何かが飛んできた。
バシッ
とてもいい音をたてて床にバサリと落ちる。北斗のこめかみに青筋が浮かんだ。
「・・・オイ、柊。テメェ何しやがる」
落ちたものを拾い上げる。それを柊の前に突きつけわめき出した。
「こんなもん頭に投げんじゃねぇ！今月特大号でいつもより分厚い漫画本を投げつけやがって殺す気か！！その前にこれ商品だろうがッ！！」
柊も負けじと言い返す。
「何で俺がトイレと仲良くなったターゲットを待たなきゃならねぇんだよ！！」
「知らねーよ！俺に逆ギレすんな！！」
三人は今、トイレに閉じこもってしまった今回のターゲットを待ち

伏せしていた。どうやらターゲットは何人かで違法の薬を使っているらしい。ターゲットを尾行してアジトを突き止めようとしたところ、コンビニのトイレに入ったっきり出てこない状態だった。
突然の仕事の依頼によってしんくとの遊び？に水をさされた柊はもともと機嫌が悪かったのに、ターゲットがトイレに引きこもったせいで余計に不機嫌になっていた。

「ふざけんな・・・絶対ぶっ殺す」
「今回はアジトを突き止めるのが目的ですから、殺しちゃだめっすよ」
「そうだそうだ。絶対殺すなよ！あーくそ、なんでこいつを連れてきちまったんだろうなぁ」

頭をさすりながら考える。
そもそもこんな簡単な仕事を頼むほうがナメてる。なんで俺たちがヤクザでもなんでもねぇ一般人を追わなきゃなんねぇんだ。
俺たちにはもっと大事な仕事があるのに・・・

◆◇◆◇◆◇◆

「燈夜、大丈夫？」

ふらふらと歩く燈夜を気にしながら、デパート内をショッピングカートを引いて歩く。

「・・大丈夫、です・・・」
「そう？具合が悪くなったら言ってね。しんくに薬もらってあるから」

「・・・ありがとうございます」

燈夜は昔から身体が弱い。なぜかしんくが薬を調合できるので、病院に行かずにしんくに薬をつくってもらっていた。

燈夜がふらふらしながら果物コーナーに近づきりんごを手に取る。

「りんご・・・買ってもいいですか？」

真っ赤なりんごを両手で持ちゆきに渡す。

「もちろん。そうだねぇ、みんなりんご好きだから・・・六個くらい買っとく？」

「はい」

ゆっくりと残りのりんごをカゴに入れていく。

「ねぇ、燈夜。今回はボクたち仕事外されちゃったけど、その分頑張って夕飯作ろうね！ということで、今夜は激辛１０倍カレーにしない？」

それを聞いて燈夜は首をぶんぶん横に振った。

「だっだめです・・・み、み、みんなに怒られます」

燈夜がカタカタと震え出す。よっぽど嫌な思い出があるらしい。涙目になって訴える燈夜にゆきは慌てて言う。

「そ、そっか。ごめんね燈夜。燈夜は辛いのだめなんだっけ。でも大丈夫。ボク両方いけるから激甘ラブラブカレーでも」

「だっだめです！！今日はホワイトシチューにしましょう！僕今日

はホワイトな気分なんです！」

スラスラと話す燈夜を見てゆきは驚いたように目を丸くした。

「よっぽどホワイトシチュー好きなんだねぇ」

◆◇◆◇◆◇◆

北斗が柊が叩きつけた漫画をレジで買おうとしている時だった。しんくの真横を誰かが通り過ぎた。あくびをしながらガラス窓の向こうを見ると、

「・・・ん？あれ？あれれ？」

「・・・何？」

うるさそうに顔をしかめる柊にしんくは窓の外を指差す。

「あの横断歩道を渡ってるのって・・・・ターゲットさん？」

「ん？あぁそうだな・・・は！？」

二人は顔を見合わせ一気に走り出した。

「北斗！奴がトイレから出た！！」

と言い残して。

「あークソッ！何でもっと早く言わねぇんだよっ！死ね！！」

コンビニを出たときには信号が赤に変わっており、二人の目の前を車がビュンビュン通り過ぎていく。

「待ってられないっすね。何かあれば・・・あ」

「何」

「見失っちゃいました。テヘッ☆」

りんご飴を持ったまま首をかしげて笑う。柊はこぶしをにぎり、しんくの頭めがけて突き出したがヒラリとかわされる。

「カワイ子ぶってんじゃねー！！死ねっこのバカりんご！！」

「だって～人が多すぎちゃってわかんないんだもんっ」

「もんっじゃねぇー！！！」

そんなやりとりをしているうちに信号が青くなる。とりあえず走って渡りきり辺りを見回す。だが、それらしき人は見当たらない。すでにここから見えない所にいるのだろう。しかし、

「・・・いた。次の信号を右に曲がる！走れ！」

しんくは驚き柊を見ると、柊は右目にあったはずの眼帯を外していた。

左右で色の違う瞳。

深緑の瞳を爛々と輝かせて、あの時と同じように楽しそうに楽しそうに笑っている。

「・・・あーあ。その眼帯外してほしくなかったっす」

人ごみを避けて走りながら柊に皮肉げに言う。

「視力メッチャいいんですよね、それ。リミットつきだけど」
「お前が外させたんだ。だから責任とってさっきの続きしようぜ！」
「絶対オレが勝ちます！」

スピードを上げる。信号の角を曲がると人気が少なくなり全力で走る。そして二人はターゲットに向かって全体重を乗せたとび蹴りをくらわした。

「ぐがぁッ！」

不運なターゲットは突然の襲撃になす術がないまま気を失ってしまった。

「俺の勝ちだ！」
「オレの勝ちです！」

ほぼ同時に叫んでいた。

「・・・はぁ？」
「・・・今の完璧オレが早かったっすよ」

しんくはりんごをしゃくしゃく食べる。柊は半ば呆れながら眼帯を右目に付け直した。すると後ろからこっちに近づいてくる足音が聞こえた。

「「あ」」

二人は足音を聞くと大事なことを思い出し、さっき蹴り飛ばした男をゆすり起こそうとする。

「おい、お前早く起きろよ」
「ここは寝る場所じゃないっすよ～」
足音はどんどん大きくなる。そして、
「おらぁーーー！！殺すなっつったっただろうがぁーーーー！！！！」
怒鳴り声が路地に響き渡った。
「何してくれてんだよ！！尾行するっつったじゃねぇか！テメェら尾行の意味もわかんねぇのかッ！！」
目を吊り上げて漫画を投げつけてくる北斗に柊は真面目な顔をして言った。
「北斗。オレは殺ってない。殺したのはこいつだ」
「いやいやいや。先に殺ったのは柊っすよ」
互いに責任を押し付けあう。北斗は倒れている男に近寄り腕を掴んだ。
「そうっすよ。オレは口癖のように殺すやら死ねやら言ってる人とは違いますから。ピュアな心を持った善人ですよ。人を殺すなんてできないっす」
「いや、お前は化けの皮を被った極悪人だろ。俺が言葉で精神的に人を殺してるなら、お前は肉体から魂を狩っていく死神だ！」
北斗は男の腕を離し、二人にツッコんだ。
「おいっこいつ脈あるじゃんか！！死んだって言い出したの誰だよ

っ！！」

北斗は男の骨が折れてないことを確認すると、頬をぺちぺち叩いて呼びかけた。

「大丈夫かー？？お前こいつらに勝手に殺されて悲しかったよなぁ。でも人生まだまだこれからだ。ＣＭで聞いたことあるだろ？」

「・・・ん」

「あ、起きた」

男は意識を取り戻したらしい。が、北斗を見た瞬間顔から血の気が引いていく。

「あ、あ・・・」

「おい、おっさん。大丈夫か？」

「うぁ・・・・うわぁぁぁぁあぁぁぁぁぁ！！！」

「うぇっちょ、おっさん！！」

男は叫びながら北斗を押しのけ、猛スピードで駆け抜けていく。

「え、何？」

ターゲットを逃すわけにもいかないので、三人はわけがわからないまま男を追いかけた。

◆◇◆◇◆◇◆

「全部入りました・・・」

「あ、入った？よかったぁ。袋代取られなくてすむね」

全部で三つのエコバックを持ちデパートから出ようとする。

「ゆき・・・僕が持ちます・・・・」

「え？いいの？じゃあこれ持って。重いから気をつけてね」

りんごのみが入った袋を渡す。燈夜は両手でしっかり持つと申し訳なさそうに言った。

「・・・すみません。気を使ってもらって」

「ん？何がー？」

一番軽い袋を渡してもらったことに気づいた燈夜だが、ゆきの優しさを汲み取ってそれ以上何も言わなかった。

「もう真っ暗だね」

外にでると、空には月が輝いており暗闇を儚く照らしていた。二人でゆっくり歩き出す。

「今頃三人は何してるかねー」

「・・・・」

「そろそろ仕事終わるかなぁ。ねぇ燈夜」

燈夜に呼びかけるが返事がない。

「そっか。もうそんな時間かぁ」

ゆきは何かを理解したように呟く。

「あっ噂をすれば・・・」

ゆきが前を見る。そこには何かを絶叫しながら走ってくる男とそれを追ってくる三人の少年がいた。

「待てよおっさん！目覚めた時に女じゃなくて俺で悪かったけど、そこまで嫌がらなくてもいいだろっ！」

「目覚めに北斗のごつくてチャライ顔を見て逃げないやつはいないと思う」

「いや隊長は関係ないと思います！あいつ薬使ってるからきっと幻覚っっあ！」

しんくが手を振っているゆきに気づく。北斗に目配せすると北斗も気づいたらしく二人に叫んだ。

「ゆき！！燈夜！！おっさんを止めろー！これ以上失敗はできねぇー！！」

悲痛な叫びを聞きゆきが苦笑しながら構える。しかし燈夜が先ほどからは考えられない空気を漂わせ、薄笑いしながらゆきに囁いた。

「・・・僕が行く」

そういうと同時に燈夜は大口を開けて叫んでいる男に向かって飛び出した。りんごをひとつ持って。

「燈夜が行くのか！なら俺たちもっ！しんく、お手！！」

「は？お手？」

こんな状況で何を言っているのかと疑問に思いながら言われたとおりにする。

「おかわりっ！」

反対の手を出してくる北斗に、しんくも反対の手を出す。

「うっしゃあ！！」

「あっっ！！！オレのアメちゃん！！」

おかわりをしたときにりんご飴をとられた。

「オレのアメちゃんをどうする気ですか！？」

「そりゃもちろんっ、こうするんだ！！」

北斗はりんご飴を思い切り宙に投げた。同時に燈夜がりんごを持って男に突っ込む。そして、

ガゴッ

前からりんごを食わされ後ろからべとべとのりんご飴を投げつけられた男は再び眠りに落ちた。

「燈夜！！よくやったぁー！！俺とお前の連携プレーは最高だぁ！！！」

北斗はそのまま燈夜に向かって抱きついた。

「グフッ」

はずだった・・・・

「バァカ。僕が隊長に合わせてあげたんですよ？感謝してほしいぐらいです」

「うっ、ぐ・・・・燈夜ぁ・・・・・」

みぞおちを蹴られて腹を抱える北斗に柊が哀れな目を向ける。

「・・・・夜の燈夜にそんなことするから」

「もう暗いからテンション上がっちゃったみたい」

「うぅ～・・・・中三のくせに高三にはむかうとは・・・・」

「はっ、ほざいてれば？」

北斗は反抗期になった子供の父親の気持ちになりながら、後ろにいるはずのしんくに声をかけた。

「しんくぅ、助け、て・・・・え？しん、く・・・？」

そこにはにんまり笑いながら片手にりんごを待ったしんくが。

「た～いちょ。オレのアメちゃん、弁償してくださいねっ」

「や、やめろ！！しんぐぼおぉぁぁぁー！！！」

りんごを口に突っ込まれた北斗はその後、しんくに三ヶ月飴を買い続ける羽目になった。

「隊長、アメちゃんの恨みは恐ろしいんですよ☆」

二話　いつもの朝

朝の日差しが目に眩しい。
働かない頭でぼーっと天井を見つめる。目の前が少し霞んでいてよく見えない。
毛布一枚でちょうどいい暖かさのこの季節。ポカポカしていて布団から出たくない。もう少しだけ寝ようと布団を被りなおそうとすると、視界の隅に黒いものが映りものすごい速さで落ちてきた。

「いぃっつ！！」

腹に直撃したが声を押さえ込み、なんとか耐える。布団ごと腹を守るように丸まり小さく呻いていると、首から肩にかけて衝撃が走った。

「いぃッ？！っってぇ！！」

鉛が降ってきたような感覚に飛び起きようとしても動けない。だが、この場所にいると次に何がくるかわからない。身の危険を感じ、必死になって布団から這い出ると上から声が降ってきた。

「何してるの、北斗？」

北斗は首がつるような痛みに耐えながら上を見上げ、とぎれとぎれに言った。

「ゆき・・・・もう、いやだ・・・」

◆◇◆◇◆◇◆

ゆきは寝巻き用のジャージの上に胸当てのついた赤いエプロンを着ていた。少し長めの茶色い髪を後ろで一つに縛っている。

「だから柊と燈夜の間に寝ちゃだめって言ったのに」

右手に木しゃもを持ってジャガイモや肉の入った鍋をかき混ぜているゆきはなかなか様になっている。北斗は制服の上にゆきと色違いのクリーム色のエプロンを着る。

「いや、俺は真ん中には寝てない。そんな記憶はないぞ」

ヒモを後ろで縛りながら思い返す。

「昨日は確かに一番端のしんくの隣に寝たはずなんだ」

「じゃあ、しんくが起きた後に何かあったんだね。ボクが起きたときにはもう、真ん中にいたから」

「しんくも蹴られて起きたんじゃねーか？ったく、燈夜もかわいい顔して寝相悪いよなぁ」

「実は北斗も寝相が悪いんじゃないの？」

ゆきが笑いながら北斗を振り返る。北斗は言い返そうとしてギョッとした。ゆきの手の中にギラリと光る鋭い刃物が握られている。

「ゆきそれ危ねーからっ！」

歩いてこようとするゆきを急いで止める。ゆきは北斗の視線の先を見てあぁ、と言って頷いた。

「大丈夫だよ～。別に刺したりしないから」
「・・・・・疑ってはないんだが、ゆきが持ってるとつい止めたくなるんだ。わりぃ」

ゆきのいつもの笑みが悪魔の微笑に見える。背筋がぶるりと震えた。

「ゆ、ゆき。俺が全部切るから他のことをやってくれ・・・・」
「え、いいの～？じゃボクは魚焼くね」

北斗の思いも知らず、ゆきはお礼を言って冷蔵庫を開けに行った。
鮭の切り身を出すと、せっせと味付けを始める。
するとリビングの方から清々しい声がした。

「はよーございまーす。いい匂いっすね。今日は肉じゃが？」

見るとしんくがリビングから顔を覗かせていた。制服の上に紫のカーディガンを羽織って、手には救急箱を持っている。

「おはよう、しんく。朝からお疲れ様」
「今日も散歩に行ってたんじゃねぇのか？」
「いえ、燈夜の薬が無くなりそうだったんで。あと、風邪薬も入れときました」

救急箱をぶらぶらさせながら答える。しんくは普段一番に起きて家の周りを散歩している。しかし今日は薬を作っていたようだ。
引っ越すたびに、しんくには他の人にはないしんく専用の特別な部屋が与えられる。そこでしんくは色々な薬を調合していた。

「頼んどいた薬剤が昨日届いたんですよ。さすがボスは仕事が早い

っすね」

しんくが薬を調合できる本当の理由を彼らは知っていた。親が薬剤師だという見え透いた嘘も、しんくの最大の気遣いだということも。

「悪いな、しんく。ありがとう」

「い～え。俺も久しぶりにそれ手伝うっすわ」

そういうと、しんくはリビングに戻っていったが、すぐにエプロンを着けて戻ってきた。

「何すればいいっすか？隊長よりも役に立つと思いますよ」

北斗の切った玉ねぎを見て言う。玉ねぎはまな板の上に散らばっており、形がさんざんなことになっていた。

「仕方ねぇだろ？こいつ、すげー攻撃してくんだよ」

「にしてももう少しマシな切り方できないんすか？指、切りますよ」

二つ目の玉ねぎを切ろうとしている北斗に指摘する。北斗はなみだ目になりながら、ゆっくり包丁を下ろす。

「玉ねぎの代わりに隊長の指が入ってるとか嫌だねぇ」

「グロイ想像すんなっ！」

「意外とあるかもしれないっすね。赤く染まった血のスープに隊長の指が」

「だぁーーー！！もうやめろっ！気が散ってマジで指が飛ぶ！！」

血眼になって玉ねぎと格闘する北斗。しんくはゆきに近寄り小さく呟いた。

「隊長って何で料理できないんすかね」
「他のことは必要以上に器用なのにねぇ」
北斗を横目で見ながら二人で話していると、怒声が飛んできた。
「しんく、ゆき聞こえてるぞ！！早く飯作れっ」
涙を拭きながら言う北斗にゆきがため息を吐きながら言う。
「なみだ目で言われても迫力ないよ～」
「哀れな目をして言うなあッ」
その瞬間北斗の指に小さな痺れが走った。

◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・・大丈夫ですか？」
「燈夜に心配されるとか・・・・・終わりだな」
ご飯を食べ終えて支度をしていると、柊と燈夜が北斗の指に絆創膏が張ってあるのを見つけた。じーっと見てくる二人に手をひらひらさせて言った。
「これが男の勲章だ！今日の飯がうまかったのは俺が丹精込めて作り上げた愛の結晶だったからだ」
「・・・・・意味わかんねぇし」

北斗の指に興味がなくなった柊は分厚い漫画を読み始めた。いつか北斗が買った漫画が柊のちょっとした暇つぶしになっていた。

「おいおい、早く着替えろよ～。昼飯も買わなくちゃいけないんだからな」

「・・・・・パン屋がいい」

「おう、パン屋でもいいぞ」

柊が漫画から目を離し北斗を見る。

「・・・・・やっぱやめた」

「人の顔を見て判断するなっ」

「あ、オレはパン屋がいいっす」

いつの間にか隣に立っていたしんくが言った。黄淡色のカーデガンを持っている。

「あ・・・」

それを見た燈夜が小さく呟いた。しんくが優しく笑い、燈夜にカーデガンを渡す。燈夜はそれを受け取ると嬉しそうに笑って、自分の胸に大切そうに抱えた。

「ありがとうございます・・・・」

「これ大分伸びちゃったけど、本当にこれでいいの？また違うのあげるよ？」

しんくは今までに何度も言ってきたことをもう一度口にしてみる。だが燈夜は首を横に振った。

「いいんです。これがいいから・・・・」
燈夜はゆっくり袖を通す。ずっと前にしんくにもらったカーデガンはやはり燈夜には大きくて、手が隠れるほどだぼだぼになっているけれど、燈夜がそれでいいならしんくは無駄に口出ししないと決めていた。

「燈夜、薬は飲んだかー？」
北斗が柊に制服を投げながら聞く。
「はい、いただきました」
「よし、じゃあ学校行くぞ！ほら柊！早く着替えろっ！！」
柊は文句を言いながら着替え始める。燈夜としんくが鞄を持って部屋から出て行った。するとすぐに、しんくの大声が聞こえた。

「隊長ー！ボスがいますよー」
その言葉に北斗が一瞬氷つく。柊も驚いたような顔をして、急いでしんくの声がしたリビングの方に行った。そこにはしんくだけでなく、燈夜もゆきもいてテレビを覗き込んでいる。
誰も一言も発さず、ただ薄い液晶画面に見入る。
アナウンサーの抑揚のない声だけが部屋に響く。テレビには警察が何人か映っており、マスコミの人たちがそこに押し寄せていた。その端に小さく四十代くらいの髭を生やした男性が映っている。
誰かが唾を飲む音がした。
警察の服を着ているその男性は、他の警察と共にすぐに消えて行った。そしてすぐに次のニュースが流れ始めた。
緊張が一気に解ける。最初に口を開いたのはゆきだった。

「関係、なかったね」
ほっとしたように言う。北斗が柊に鞄を渡しながら呟く。
「親父もテレビに映ったのは予想外だっただろうな」
「そうだな」

ボスは彼らにとって大事な存在。そして北斗にとっては実の父親だ。彼らの仕事は全てボスからのものであり、薬を調合するための薬剤を手配してくれるのもボスだった。
そして、彼らがこうして生きていられるのも。

「さてと・・・・学校行くか！！」

北斗が気分を変えて言うとみんなが動き出す。

「あそこのパン屋うまかったっすよ。絶対あそこがいいと思います！」
「しんくは甘いものばっかり食べてるから髪の色素がみんなより薄いんだね。・・・・・禿げるよ？」
「ひどいっ！甘いものは関係ないと」
「将来ハゲ有力候補だな」
「うぅ～。みんなしてオレをいじめるんだ」
「しんくは、多分大丈夫ですよっ」
「・・・・・多分ってなに？」

北斗が後ろから笑って見ていると、ゆきが隣に並んで言った。
「ねぇ北斗。お父さんに会いたくなった？」

北斗はゆきをちらりと見ると難しい顔をした。

「どうだろうな。まあ、言いたいことはたくさんあるし」

そして少し間を置いてから独り言のように呟いた。

「全てが終わったら、な」

三話　カラーコーンの日

鐘が鳴った。
授業の終わりを告げるチャイム。そして、四十分間のランチタイムの始まりを告げるチャイムだ。寝ていた者も携帯をこっそりいじっていた者も、この音を聞くとバラバラに散っていった。
一番後ろの窓際の席で飴を舐めていたしんくも立ち上がる。鞄を肩にかけ、隣の席の女子が話しかけてくる前に教室から駆け出した。お気に入りの棒付きの飴をくわえながら、廊下に出てくる生徒を避けて走る。
階段を下りようとしたとき、下から下品な笑い声が聞こえてきた。

「そんでよぉ、先チャンまじビビッちゃって腰抜かしてやんのー」
「うっわ、ウケル～。バッカじゃねぇの。あ・・・・・」

じゃらじゃらしたアクセをふんだんに使って、髪をありえない色に染めた男子集団がしんくを睨みつける。

「げっ」

しんくは急いで方向転換し、今来た道を反対方向に走る。

「コルァッ待てや！テメェこの前のクソガキのダチだろ、あぁ？！」

集団で追いかけてきた。昨日はこのルートで見つからなかったんだけどな、と思いながらもう一つの階段を目指して走る。

「待てやぁガキ！逃げてんじゃねぇぞっ！！」
「待てと言われて待つバカはいない・・・・っていう人はだいたい

逃げ切れるんすよね～」
「テメェら首かっ飛ばして脳みそほじくるぞッ！！邪魔だどけ！」
廊下に生徒たちが増えてきた。購買にお昼を買いに行くのだろう。生徒たちは怒鳴り声を聞くと両端に寄っていく。
「あ〝ぁー、どかなくていいのに。できればあの人たちの邪魔をしてほしいっすわっと」
階段を下りる際になぜか置いてあった三つのカラーコーンを倒す。すると、追ってきたチンピラ共がそれに躓きドミノ倒しのように転んでいく。しんくはそれを見上げながら、飴をクルクル回して口笛を吹く。
「ひゅー。すごいっすね！そのコケッぷりに敬意を払ってオレのお手製アメちゃん甘さ控えめ号をあげちゃいます♪」
ポケットから飴を一掴み取ると、放り投げて急いで踵を返した。
「ナメんじゃんねぇぞ！こんガキャーぶっとばしてやる！！」
背後の騒音を聞きながら階段を一番下まで降り、階段と壁に挟まれた小さなスペースに体を滑り込ませる。数秒遅れて来た足音が遠ざかっていくと、座りながら溜まった息を吐き出した。
「はぁ～・・・・・。毎度毎度追いかけられちゃたまらないっすよ。ゆっくりアメちゃんも舐められない」
ペロリとコーラ味の飴を舐める。これは全部柊のせいだった。再び息を吐き出す。

この学校に転校してきた日に、不良に絡まれた柊が全員の意識を飛ばしたらしい。
普通の不良ならよかった。だが、不運にもその不良がこの学校を裏で牛耳っている奴らの下っ端だったらしく、よく一緒にいる自分たちまで復讐の対象になってしまった。
まぁいっか。おかげでアメちゃんの処理もできたし。
クルリと飴を弄びながら、パン屋で買ったチョコクロワッサンを食べる。と、そこにゆきが顔を覗かせた。

「あ、しんく。こんなところで何してるの？」
「ん、ゆっきーこっちきて！今逃げてるんすよ、あの連中から。見つかったら面倒なんで」
「あーごめん」

ゆきがしんくの隣に腰を下ろす。

「柊には喧嘩するだけじゃなくて、何もしないで逃げることも覚えてもらわないとね～」
「恨んでくる輩が全国に増えていきますよ。ほんともう、何なんだか・・・・」

チョコクロワッサンの最後の一かけを口に放り込む。鞄からチョココロネをだそうとしたが朝のことを思い出し、ゆきをちらと見て諦める。その代わりに手に持っていた飴をくわえた。

「それで、ゆっきーはどうしてここに来たんすか？」
「え、特にすることがなかったから学校探検してただけ」

すんなり答えられた。相変わらずマイペースだなと思う。だが、そのあとに一言付け足した。

「でも、しんくに会えたからやることできたよ」
「なんすか？」
「『あいつら』の居場所の特定」

しんくの顔色が変わる。朝、画面越しにとはいえボスの顔を見てから『奴ら』のことが気になっていた。
しんくだけでなく彼ら全員にとって憎むべき相手。排除すべき敵。
何年間も奴らを追ってここまで来た。
もう少し、もう少しで『奴ら』の尻尾を掴めそうなのだ。

「・・・わかったんすか、場所が」

緊張した面持ちで聞く。ゆきは携帯を取り出し、地図を表示させた。

「なんとなくだよ。本拠地かどうかもわからない」
「・・・・・この赤丸ですか？何箇所かあるんですけど」
「うん。それでしんくに聞きたかったんだ。どんどん絞っていきたいからね～」

地図をじっと見つめるしんく。そして少し高めの声で指摘し始めた。

「ここ行ったけど、何もありませんでしたよ。ここもですねー」
「ここね。じゃあ、こっちは行った？」
「こっちも行ったんすけど警察がパトロールしてたんでないと思いますよ」
「・・・・・どこまで散歩してるの？すごいね」

大分赤丸が少なくなると、ゆきがそれを見て呟いた。

「この川辺が怪しいかなぁ」
「川って・・・・工場がたくさん並んでるとこっすか？」
「廃工場とかもあるみたいだから・・・・」
川は学校に近い商店街を抜けた先にある。ゆきが放課後偵察に行ってみると言い出した。
「でも一人じゃ危ないっすよ。何かあったときのために全員で行くのがいいと思います」
「やっぱり？それじゃみんなで行こうか」
意外とあっさり決定してしまった。このことを三人にいつ伝えようか話していると、真上でドタバタと音がした。よく聞きなれた声とあの下品な笑い声。階段から降りてきた後姿を見て確信する。
「・・・柊と隊長追われてるっすね～」
「自業自得だね～」

◆◇◆◇◆◇◆

「柊、こっちだ！早く走れっ！！」
「何で殴ったらいけないんだッ」
北斗の後ろを眉根を寄せて走る柊。今にも北斗に飛び掛りそうだ。
「生徒の前で殴るわけにいかねぇだろ！なるべく人気の少ないところで・・・・・」
「北斗に合わせてたら日が暮れる」

下駄箱が並んだ広い空間に出ると柊が足を止めた。

「おい柊！？これ以上敵増やしてどうすんだ！いや、お前にとってそんなつもりはないんだろうけど」

北斗は一瞬考えを廻らす。

「いやいやいやでもだめだっ！お前がいつか世界中から恨み妬み憎み嫉妬その他諸々を買って傷つくところを見たくないぞッ！！」

「うるさい死ね」

「その喧嘩っ早いの直せ！お前の愛は他の奴らには伝わりにくい・・・っておいおいマジかよ」

下駄箱の陰から何人ものガラの悪い生徒が出てきた。ここで待ち伏せしていたのだろうか。

「テメェら、今度こそ始末してやる」

手をボキボキ鳴らしながら近づいてくる。北斗は相手をなだめようと愛想笑いを浮かべた。

「いやぁ～、話せばわかるって。平和的に事を解決するのも親玉の役目だろ？」

「残念だがオレは頭じゃねぇ。だからオレはテメェらをシバく権利があるってことだッ！！」

「て、ちょと待て！権利ってなんだよ！何か道理がおかしうぉわ！！」

問答無用とばかりに一斉に飛び掛ってくる。柊は既にそれに応対し、

どんどん周りに意識不明者を積み重ねていく。

「こいつらが殴ってきたんだ。問題ないだろ」

「まぁ正当防衛だよな、これは。うぉっ、あっぶねー」

後ろからも殴りかかってきた。そのまま腕を取り捻り上げ、次にきた奴に投げつける。すると、誰かが呻きながら声を上げた。

「クソ！！テメェら何なんだよっ！」

「どこのヤンキーだぁ？！喧嘩馴れしてるわ不味い飴食わせるわ」

「飴？何のことだ、よっ」

北斗が男子を背負い投げする。

「とぼけんじゃねぇぞ！テメェら仲間なんだろ、あぁ？」

「そんなガンとばされても身に覚えがねぇー！！」

「あんな変なもん食わせやがって！！おかげで腹壊した奴が続出してんだぞッ！責任とれ！！」

半泣きになりながら訴えてくる。北斗ははっとした。

「しんくかっ！あいつがあの滅茶苦茶苦い、ゆきしか食えないようなお手製甘さ控えめ号をあげたんだな！！」

「・・・・・殺す」

「え、柊？ちょやめ、」

柊が北斗にとび蹴りを食らわす。が、北斗が傍にいた男子を突き出し奇声を上げたのはその男子だった。

「柊！！落ち着けっ！何で俺にあたるんだッ」

柊とチンピラの連続攻撃をなんとか防御しながら叫ぶと冷静な声が返ってきた。

「ゆきを侮辱した」

「してねぇー！！少なくとも俺にそんな気はないっってぇ！コラ人の話は最後まで聞けッ！」

「うるさい死ね殺す！お前なんか屋上に逆さ釣りにして女ともどもロードローラーでひき潰してやるっ」

「おいやめろっ俺が悪かった！だからその蹴りをそいつらにかましてやれっ」

とそのとき、横から赤いとんがり帽子のようなものが飛んできた。二人は避けながらその方角に目をやる。すると、そこには大量の赤いとんがり帽子が。

「・・・・カラーコーン？何でそんなにあるんだよっ」

さっきの連中がそこに並んでカラーコーンを次々と投げ飛ばす。

「え、ちょっとそれはうおっ！」

顔の横を掠める。柊はおやつを与えられた子供のように楽しそうに笑っていた。

「機嫌直るの早いなー、柊」

「黙れ死ね金髪チャラ男残念豚クソ野郎」

カラーコーンが後ろに山積みになっていく。と、そこで攻撃が止んだ。真ん中にいた男子が二人を指差して言った。

「オイ、テメェら！！俺様の餌食になりたくなければ大人しく俺様を拝んで褒め称えろ！！」
「「は？」」

何を言っているのかわからず、思わず呆けた声を出す。

「でなければ、お前らの仲間がどうなってもいいんだな？やっちゃうぞ？やっちゃうぞ？いいんだな～？」

意味深な言い方をする。北斗はちょっとイカレた男子を見ながら、困ったように言った。

「いやぁ、手出されても困るけど・・・・具体的に誰を？」

男子は口端をニタァと吊り上げ、待ってましたと言わんばかりに手を腰に当てた。

「あの、ひ弱そうな中等部のガキだよ」
「！！」

それを聴いた瞬間、二人の目つきが変わった。鋭い目をして指を鳴らす二人に、男子が驚き一歩後ずさる。

「え？え？」

男子は間違っていた。仲間を餌にして脅せば引き下がると思っていた。だから既にそいつを捕らえて連れてくるように指示も出した。しかし、二人には逆効果だったらしい。よりにもよって燈夜を餌にするとは。

「ぶっ殺す」

それだけ言うと柊が男子に殴りかかる。それを合図に再びカラーコーン攻撃が始まった。カラーコーンが邪魔で前に進めない。北斗が舌打ちすると、後ろに積み重なったカラーコーンに手を伸ばした。

◆◇◆◇◆◇◆

男子は指示を出した奴を止めるために走り出した。携帯を持っていることも忘れて無我夢中に走る。
高校と併設された中学校舎に入るとすぐにそれは見つかった。
とても痛々しい状況で。
男子の膝が崩れ落ちる。その男子のプライドや矜持、その全てがボロボロになった瞬間だった。

「いやぁ〜、すいませんね。まさか燈夜さんがこんなに強い方だとは知らなくて」
「いえ・・・あの、こちらこそ・・・・すみませんでした」

廊下の壁に背をもたれて座っている男子に、燈夜が手当てをしていた。湿布を張ったり、包帯を巻いたりしている。
手当てをしてもらっていた男子が自分を見ている存在に気づき慌てて立ち上がった。

「神崎さん！すいませんしたっ！オレ失敗しちまって」
「いや・・いいんだ。もうだめだな。頭になんて言えばいいんだ・・・」

「神崎さん・・・。お、オレも一緒に謝りますっ」
燈夜は首をかしげながら、しばらくその光景を見ていた。やがて、神崎の精神も回復してきたところで燈夜が質問した。
「もしかして・・・みんなが、迷惑をかけましたか？ケホっ」
燈夜の声を聞き、神崎の顔がみるみる蒼白になっていく。神崎は燈夜に頭を下げて震える声で言った。
「ち、違うんっす！俺様が悪いんです！すいません、すいませんっ赦してくだぐはぁっ！！」
言い切らないうちに神崎は倒れた。というより蹴り倒された。
「お前燈夜に何をした。今すぐその腐った目ん玉飛び出るくらいにお前の頭カチ割ってやろうか」
「燈夜ーーー！！大丈夫か無事か？！悪い人にはついて行っちゃだめだぞっ」
北斗にぎゅっと抱きつかれた。軽く頭を踏んで殺気だっている柊に慌てて声をかける。
「柊！僕は何もされてないですから、ケホっケホっ」
「燈夜風邪かッ？！今すぐ早退して薬飲んで寝るぞっ」
「大丈夫ですから・・・。それよりその人ケホっ」
早く話そうとする度に咳がでる。そしてその度に柊の怒りボルテージが上がっていく。

「・・・殺す！」

今まさに蹴り殺そうとしたその瞬間に軽快な音楽が流れ出した。耳障りな音源を手に取り、ボタンを押し耳に当てる。

『やっほ～、柊今暇ですよね。オレもすることがな』

ブチッ

「・・・・・・・・・」

携帯を握り締め再び足を上げる。

～～～♪

今度は北斗の携帯だった。

『もしもし北斗？ボクすごく暇でさ』

そして、重なるように柊の携帯が音楽を奏でる。震える手で携帯を開き、またも通話ボタンを押す。

『柊、放課後遊びに行かないっすか？面白いとこがあるんですよ～』

『みんなも行きたがると思うんだよね～』

柊と北斗は深く息を吸い込んだ。そして、

「「今忙しいんだよ！あとにしろっ！！」」

携帯越しに怒鳴った。しかし、相手は全く気にしていないようで普通に話しかけてくる。

『もちろん行くっすよねっ！商店街の傍なんで店も少し見たりして』

「お前一人で行ってろッ！！」

『雑貨屋さんとかもあるみたいなんだ。北斗も気になるでしょ？』

「雑貨に興味はねぇ！！つか、後ろでしんくの声が丸聞こえだッ！」

携帯が潰れるのではないかと心配になるほどぎゃーぎゃー騒いでいるのを見て燈夜が北斗の腕を抜け出す。そして腰を抜かして座り込んでいる神崎に近寄って行く。

「大丈夫ですか・・・？すみません、怖い思いさせちゃって・・・今のうちに逃げてください」

「すいませんっこの恩は必ず返します！お、おい！早く支えろっ」

「はいっ！」

湿布を張った男子が神埼を支えて立ち上がる。それを見送ってから、柊と北斗の方に向き直った。

「ケホっ、隊長、そろそろ授業が、ケホっケホっ」

裾を引っ張りながら言うと、北斗が気づき携帯に向かって叫んだ。

「そうだッ！もう授業が始まるぞ！ゆきも早く戻れ！！」

通話を切り柊にも同じ事を言う。

「ほら、柊も終わりだ。燈夜が言ってくれなきゃ遅れてたぜ。あり

がとな、燈夜。・・・燈夜？」

燈夜の顔が赤い。息も荒くなっていた。北斗にしがみつくように立っていたが、もう限界なのか北斗の胸に倒れ込む。

そして、意識を手放した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2917z/

真実のヤクソク

2011年12月21日15時59分発行